

第5章

卷末





家に土砂「逃げられぬ」

断続的に激しい雨

広島で救助要請殺到



大雨で冠水した道路。水際では、消防隊員や警察署員がなすすべもなく水際を見詰めていた(6日午後9時34分、広島市安佐北区口田1丁目)

坂道を川のように流れ落ちる泥水、住宅に流れ込む土砂、山から聞こえる音。中国地方で断続的に激しい雨が続いた6日、広島市内や周辺では土砂崩れや浸水被害が相次ぎ、市消防局には救助要請が殺到した。避難指示が出される中、避難所となった小学校の体育館では、住民たちが不安な夜を過ごした。(1面関連)

南区丹那町では午後4時半ごろ、民家に住む50代女性から「家に土砂が入り込んで逃げられない」と119番があった。市消防局や住民によると、裏手の竹林が崩れ、1階に土砂が流れ込み、家が傾いたという。現場は、傾斜地に民家が張り付く住宅地。坂道を枝や小石が交じった茶色い泥水が川のように流れ、側溝の水もあふれた。歩いて中区の実家に避難しようとしていた会社員岩崎志帆さん(32)はまた雨が続くのか、広島土砂災害のことでも思い出す」と語った。

南区は午後3時半ごろ、近くの楠那小体育館に避難所を開設し、住民が次々に身を寄せた。雨が続き、地響きのような音も。避難者は午後10時現在、約270人となった。1歳の息子と避難した近くの保育士祝部佳さん(28)は「主人と相談して早めに避難した。家に何かあったら...」と不安そう。1人暮らしの小川通子さん(94)は「足が悪いのでここまで来るのも大変だった」と疲れた表情だった。

安佐北区口田南2丁目の住宅地では午後8時ごろ、

道路が膝の高さまで冠水。民家に水が押し寄せた。口田1丁目でも道路が広範囲に水に漬かり、住民や消防隊員、警察署員たちがもどかしそうに見詰めていた。

安芸区矢野東7丁目の住宅団地付近では午後7時50分ごろ、40代の女性2人が

避難住民 不安抱え

広島・山口「濁流見て怖く」



広島市南区の楠那小体育館に開設された避難所。時間を追うごとに住民の数が増えていった(6日午後9時59分)

大雨の影響で、広島・山口県内では避難所が開設された。身を寄せた住民たちは降りやまない雨に不安の表情を浮かべていた。

広島市が安佐南区八木の梅林小体育館に開設した避難所では午後5時現在、2

世帯3人が避難。ペットを連れて避難した近くの岡山光子さん(63)は「用水路の濁流を見て怖くなり、暗くなる前に逃げた。長引くだろうかと心配した。安佐北区の可部南小に避難した近くの無職男性(69)は、病気のため酸素吸入が欠かせない。午後4時ごろ、スベアの酸素ボンベ2本を持ち、妻(70)と身を寄せた。「避難を呼び掛けるサイレンが鳴り、慌てた。動揺している」と話した。

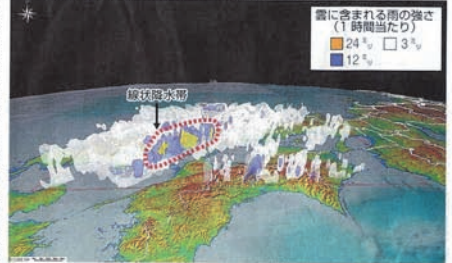
避難勧告を出した安芸高田市は、市内に21カ所の避難所を開設。同市吉田町のクリスタルアーシヨでは、夕方になると住民が集い始めた。2日連続の避難となった同町の会社員清水純さん(29)は「ここでは寝付けず、早く天気が回復してほしい」と顔を曇らせた。

山口市小郡郷の主婦三浦慶子さん(41)は防災行政無線で避難勧告がアナウンスされるの聞き、着替えとわずかな食料をリュックサックに詰め、午前10時半ごろに次男(4)と市小郡健康福祉センターに駆け込んだ。「裏山が崩れ落ちるのではないかと不安になった」と疲れ気味に話した。

2018年7月7日 中国新聞

広島上空に線状降水帯 防災科学技術研究所が解析 低い積乱雲 動き遅く

6日午後8時ごろの中国・四国地方の雨雲の立体イメージ



※防災科学技術研究所の図を基に作成

広島県内に甚大な被害に降り続いた。湿った南風をものし日本海側と西風がぶつかることで、防災科学技術研究所が解析した。上空で積乱雲が動き遅く、線状降水帯が形成された。同研究所によれば、積乱雲が動き遅く、線状降水帯が形成された。同研究所によれば、積乱雲が動き遅く、線状降水帯が形成された。

2014年8月の広島土砂災害でもバックビルディング現象が繰り返された。この現象は、上空で積乱雲が動き遅く、線状降水帯が形成された。同研究所によれば、積乱雲が動き遅く、線状降水帯が形成された。

犠牲者の7割 高齢者



土砂で押しつぶされた車の周囲で行方不明者の捜索を続ける消防隊員
＝13日午前11時40分、広島県熊野町川角5丁目（撮影・井上貴博）

西日本豪雨

中国地方3県 独居も目立つ

西日本豪雨による中国地方3県の被害で、13日までに身元が判明した計19人のうち、65歳以上高齢者が8割を占めた。中国新聞の取材で分かった。最も被害が大きかった広島県では死者のうち38人が高齢者で、1人暮らしの犠牲者は目立った。多くは自宅に土砂崩れや浸水で巻き込まれていた。災害弱者である高齢者の被害の実態が浮き彫りになった。

中国地方 死者157人に 警察庁まとめ 14府県では203人

西日本豪雨で甚大な被害が出始めてから1週間経った13日、中国地方では死者が157人に上った。警察庁のまとめによると、死者は広島、山口、岡山、鳥取の4県で計157人に上った。中国新聞の取材で分かった。最も被害が大きかった広島県では死者のうち38人が高齢者で、1人暮らしの犠牲者は目立った。多くは自宅に土砂崩れや浸水で巻き込まれていた。災害弱者である高齢者の被害の実態が浮き彫りになった。

西日本豪雨で甚大な被害が出始めてから1週間経った13日、中国地方では死者が157人に上った。警察庁のまとめによると、死者は広島、山口、岡山、鳥取の4県で計157人に上った。中国新聞の取材で分かった。最も被害が大きかった広島県では死者のうち38人が高齢者で、1人暮らしの犠牲者は目立った。多くは自宅に土砂崩れや浸水で巻き込まれていた。災害弱者である高齢者の被害の実態が浮き彫りになった。

広島、山口、岡山3県などでは、死者の状況が公表された。19人のうち、65歳以上高齢者が8割を占めた。中国新聞の取材で分かった。最も被害が大きかった広島県では死者のうち38人が高齢者で、1人暮らしの犠牲者は目立った。多くは自宅に土砂崩れや浸水で巻き込まれていた。災害弱者である高齢者の被害の実態が浮き彫りになった。

府県	死者(人)	行方不明(人)	住宅被害(棟)	避難者(人)
広島	94	25	3768	2398
山口	3	0	851	10
岡山	59	16	11325	3460
鳥取	1	0	306	23
合計	157	41	16313	5891

山陽道 一部で通行再開

本郷・河内IC 東広島県は全線通行止めが解除された。JR山陽線の一部区間も運転を再開した。

広島県内では10日、豪雨による土砂崩れや浸水で、山陽道の一部区間が通行止めになっていた。11日午前、東広島県の本郷・河内ICから、山陽道の一部区間で通行止めが解除された。JR山陽線の一部区間も運転を再開した。

山陽道は、本郷・河内ICから、山陽道の一部区間で通行止めが解除された。JR山陽線の一部区間も運転を再開した。

一般国道は、県内の185号が11日に、同市の方町と川尻町の計2カ所で通行止めが解除された。これにより、同市中部と安芸高田市の行き来が可能になった。31日の完全復旧には、あきかるる見通し。

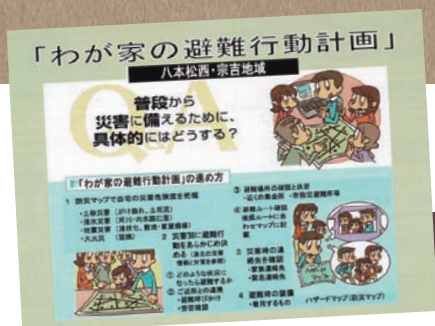
JR西日本は、山陽線の本郷・河内ICから、山陽道の一部区間で通行止めが解除された。JR山陽線の一部区間も運転を再開した。

配達不能や遅れおわびします

豪雨災害のため、当面は、部地域で配達ができなかったり、遅れりする場合があります。ご理解をお願いします。

中国新聞社

住まいの周辺の危険個所を見直し、積極的な避難行動を取って欲しい



「わが家の避難行動計画」



八本松住民自治協議会
防災委員会委員長
牧野 美三夫 さん

橋が落ち、集落が孤立する

7月6日の正午に、東広島市からの指示を受け、「八本松地域センター」に避難所を開設しました。国道2号線と国道486号線の交差点に土砂が流れ込んで通行止めになり、渋滞が起きているのを見た時は、たいへんなことになるなと思いました。近隣の人だけでなく、渋滞で身動きが取れなくなってきた人もおり、約80人がセンターに避難してこられました。東京から新幹線で福山駅まで来て、レンタカーで広島市に向かう途中、立ち往生してしまったご家族もいましたね。自治協の役員が夜通し避難所に詰めて、非常食の提供などの対応に当たりました。

翌朝、宗吉地区で橋が落ち、孤立した集落があると連絡がありました。住民の中には、病院に通わなければいけない身障者の方もおられます。山陽本線をくぐる地下道があるのですが、そこも埋もれていたので、地元の人たちと自治協の役員、合わせて40～50人で土砂を除け、何とかその日のうちに通行できるようにしました。その後もお盆過ぎまで車が出入りができない状態が続いたので、地区社協で炊き出しをして、朝晩の食事を届けました。

新たに「わが家の避難行動計画」を作成

災害後に取り組んだのが、防災マップの見直しです。平成26年の広島市の豪雨災害を受けて制作したのですが、今のままでは危機感が伝わらないと思い、委員会のメンバーで手分けをし、2週間ほど被害の多かった八本松西・宗吉地区を歩き、危険個所を確認して、住民に災害時のことを取材し

ました。土砂災害の危険性だけではなく、各住居が耐震基準を満たしているかどうかなども併せて調べ、「わが家の避難行動計画」という30ページほどの冊子にまとめました。タイトルのように、冊子を見ながら家族で話し合って防災について考えてもらえるよう、対象地域の全戸に配布し、説明会も開いています。今後、八本松町の他の地域についても順次、冊子を制作していく予定です。

今後の防災を担う若い世代を育てる

八本松町には現在12の防災会があり、年1～2回各防災会が企画して、避難訓練、避難所開設訓練、心肺蘇生訓練などを行っています。防災委員会本部でも、毎年防災関連施設の視察などをしており、昨年はコロナ禍で遠方に行けなかったため、被害の大きかった河内町の防災会と交流会を開きました。活発に意見交換ができ勉強になりました。また、八本松小学校の5年生を対象に防災教育も行っています。私たちが引率して災害現場や治山ダムなどを見学し、教室では段ボールベッドの作り方などを学んでもらっています。

まだまだ、住民の避難率は数%に過ぎません。防災委員会の目標は、とにかく避難意識を高めることです。コロナ禍もあり、自分の家の近くで分散避難してもらえるよう、お寺や企業の寮などを避難所として使わせてもらえるようお願いしているところです。今後、防災を担っていくのは若い世代です。子どもたちには、防災についての勉強の成果をそれぞれの家庭に持ち帰り、家族みんなで話し合い安心・安全な所へ早く避難するようにしてほしいです。

災害に強い地域を作るため、 共助の気持ちを広めていきたい



物資の配達の様子



「you愛sunこうち」会長（右）

河元 利行さん

「you愛sunこうち」事務局長（左）

大東 栄二郎さん

川の氾濫を警戒していたら、 後ろから土砂が

「you愛sunこうち」は河内町の自治組織で、町内各地域の情報が真っ先に入ってくるため、災害が起こればそこが中枢となって対処することになります。7月6日に警報が出たので、会長や自治組織の防犯担当が事務所に待機し、交代で町内を巡回しました。河内町は川の災害が多いので、氾濫していないか確認していたのですが、雨も小ぶりになり、まだ大丈夫だと思って深夜3時頃に終了し、事務所で一息ついていたところ、中河内の国道432号線沿いで土砂崩れが起きて家が流れていると連絡が入ったんです。事務所に詰めていた消防団の方面隊長と一緒に現場に向かうと、まさにそこは隊長の家でお母さんと妹さんが生き埋めになっていました。かなりひどい状態で見た時はダメかなと思いましたが、近づいてみるとお母さんが泥の中から顔を出していたので引っ張り上げました。普通ではない粘り気のある泥が腰までありましたが、その時はとにかく助けださなければいけない一心で、自分が危ないとか頭にも思わなかったですね。その後、妹さんも助かりました。国道沿いに川があり、そればかり心配していたら、突然後ろから土砂が来たそうです。その家は国道のすぐ脇で後ろにも家があったのですが、重機が入らなければどうにもならない状態なので、消防署員に後を託して私は現場を離れました。この現場では3人の方が亡くなられています。

完全に孤立した集落も

R432が崩れてだめ、JRがだめ、県道33号線がだめ、山の上の裏道がだめで、重機が入って通行が可能になるまで、しばらく河内町は孤立状態になりました。特にたいへんだったのが空港近くの集

落で、20戸ほどが完全に孤立してしまいました。集落の入口までは車で行けたので、崩れた斜面を切り開いてロープを伝って下りられるようにし、停電していたのでまず発電機を持って行きました。その後も1週間くらいは毎日朝晩物資を届けていましたね。学校や会社に行けなくなった地元の若い人たちがボランティアで、地域の人たちへの電話連絡や安全確認、物資の配達をしてくれて助かりました。

避難の呼びかけ体制作り

河内町ではもともと年2回防災訓練をしていますが、参加率も悪くありません。豪雨災害の後にはみんなの真剣度が違ってきます。新たな試みとして、平成31・令和元年から、広島県消防保安課の指導で災害の際の「避難の呼びかけ体制作り」を進めています。県のアドバイザーと一緒にみんなで地域を回って、危ない箇所を探し、どのように避難するか、その際の連絡網をどうするかなど指導してもらったのですが、地域の問題点を知る上でとても勉強になりました。この体制をまず上河内で実践し、その成果を他地域に広めていきます。河内町も高齢化が進んでいます。携帯で連絡ができて、最後は人の力を借りることになるので、要支援者の避難の仕組みを作っているところ

です。災害に強い地域を作るには、共助の気持ちが高まっていることが欠かせません。普段から顔見知りでないと、災害に速やかに対処するのは難しいので、地域のコミュニケーションを深めることが今後の大きな課題です。コロナ禍でイベント等が開きにくい状況ではありますが、豪雨災害でボランティアをしてくれた若い人たちとのつながりもできたので、しっかり人間関係を築き、共助の気持ちを広げていきたいと思っています。

想定外だった市街地の被災 2日間是完全孤立状態に



防災講演の様子



三津自治会事務次長・防災士

中浦 英明さん(左)

●協力

三津自治会会長

鹿島 富士雄さん(中央)

三津自治会事務局長

武部 勝人さん(右)

7日早朝の雨が激流に

安芸津町では、災害は海から来るものだと思われていて、台風に満潮が重なると海岸部が被害を受けていました。その一方、山の手で大きな土砂崩れが起きたこともあったのですが、今回の豪雨災害のように、市街地が被害を受けたことは初めてです。

7月6日の昼間、安芸津町ではさほど大雨ではなかった。しかし、夜になって出てみると三津大川の水があふれて道路が冠水していたのです。これは危ないと役所や警察に連絡し、カラーコーンを出して急いで片車線を止めました。山の手では、雨が強くなっていったんですね。安芸津町を流れる川は高低差が大きく、大雨が降ると激流になってしまうのです。川を見ていると護岸に岩が当たり、轟々と恐ろしい音を立てていました。

7日の深夜から早朝にかけて激しい雨が降り、私たちは市街地から少し離れたところに住んでいるのですが、夜が明けた頃には、すでに市街地は足を踏み入れることができないような状態になっていました。

ダムを作り、 水を放流したような状態に

さまざまところで、流木や岩、ごみなどが川をせき止め、海へと出ることができなくなった水が市街地に流れ込み、道路は濁流になっていました。ちょうど、ダムを作って水を放流し、集落を沈めたような状態になったようです。市街地にある約350軒がすべて床上・床下浸水し、駐車していた車も一つ残らず水没してしまいました。7日の夕方には水が引いたのですが、2日間ほど市街地は完

全孤立の状態で、安芸津町に通じる道路も寸断され、当会福祉保健部、女子会等による炊き出し支援をするなどした。

最初は私たちが泥水を溝に捨てていましたが、とても追いつかないので、ライオンズクラブ、商工会青年部を通してボランティアを集めました。地元の企業の人たちや東広島市の大学生が頑張ってくれて、1週間後に道路の汚泥を取り除くことができました。しかし、今度は家から出たごみで通りが再びふさがれてしまい、すべての片づけが済むまで2週間ほどかかりました。炎天下に泥まみれで作業をしてくださったボランティアの方々や、被災者の支援をしてくださった社会福祉協議会の人たちには心から感謝しております。

写真で災害の記憶を伝える

平成30年3月に自治会で川の氾濫による水害を想定した訓練を行っており、災害の大きさを割には人的被害が少なかったのはそのせいもあったかと思います。災害の記憶を忘れないようにするため、発災の日から写真を撮り続け、スライドにして皆さんに見てもらうようにしています。

私たちの地区も高齢化が進んでおり、万一の時に安全に避難してもらうためには、日頃から防災意識を高めていくしかありません。とりあえず避難できる所を近所に作る、お年寄りや体の不自由な方が安心して避難できるように器具を整備するなど、できるところから始めていきたいと思っています。

二度の災害を経て、住民の意識は高まり 早めの避難を心がけておられます



郷区高橋川の下



宇山地域センター センター長
坂田 正広 さん

予想外だった豪雨災害

「四季の里宇山」は廃校になった小学校を活用したコミュニティ施設です。7月6日は住民の方からの要請により、午後8時頃に避難所を開設しました。激しい雨が降り続いており、消防団が福富町からの要請で応援に行く途中、宇山地区で家が流されそうになっているという連絡が入ってそのまま迎えに行き、家族を連れて来られたのです。1階が濁流にのまれて、2階に梯子をかけてもらって避難した人など、14人の方が避難して来られました。隣接した公民館に和室があったので、とりあえず眠るところは確保しましたが、備蓄品がありません。翌日に農業法人から米を持って来てもらい、みんなで炊き出しをしました。宇山地区では50年前の豪雨以降、大きな災害がなかったので安心しており、防災訓練などもおさなりのものでした。

豪雨で道路が寸断されたため、しばらく宇山地区は隔離されてしまいました。7日朝から停電してしまい、何とか小さな市道が通行できるのを見つけ、西条町まで発電機を借りに行きました。地区内で倒壊した家は空き家を含めて4軒で、まだ災害の跡がいまだに手つかずのままの場所も多いですね。

令和2年にも大きな被害が

宇山地区では、令和2年7月14日にも豪雨災害があり、2人の方が亡くられました。当日は早朝5時頃から大雨になり、6時頃に家が傾いているという連絡が入ったので駆けつけると、県道が通っている裏山から土砂が流れ込み、家が飛び出したかたちで倒れています。「ここにいる。助けてくれ」という声がするので、天井が落ちて暗い中、ごみ

や建具を除けながら近づいて行くと、その家の息子さんが首まで埋まっていた、その前を水が流れていました。息をするのが難しいようで、苦しんでおられたので、「もうすぐ救助が来るから、元気を出して」と励ましました。消防局の救助隊が到着すると、二次災害の恐れがあるので私たちは退き、外から見守りました。家が倒壊しそうで数台の重機で支えていたため、なかなか救出作業が進展しません。お昼頃までは意識があったそうなのですが、午後にその方とお母さんの死亡が確認されました。その後も作業が難航し、お二人の遺体が運び出されたのは翌日の深夜3時頃でした。裏山から水が流れて来ることから、過去には、市へ要望して、部分的には改良した箇所もあったようですが、私たちも崩れるとは予測していなかった場所でした。

被害をくり返さないよう、 多方面で対策

2度の災害を経て、宇山地区の方の意識は高まっており、みなさん早めの避難を心がけておられます。道が不通になったことを経験しておられるので、雨が降ったら、市から警報が出る前に、とりあえず宇山地域センターに来られる方が多いですね。一人ぐらしが多い地区なので、それぞれの方に自治協で管理者を付け、何かが起きたら、迎えに行き連れてきてもらうよう支援者のルールを決めています。防災器具、発電機、照明器具、テント、チェーンソーなども市からの援助で揃えました。宇山地域センターから遠い人たちのために、近所の人たちが声をかけてとりあえず避難できる集会所ができました。被害をくり返さないよう万全を期していきたいです。

一人ひとりの思いを組織化し、 災害の応急復旧に取り組んでいきたい



安芸津下三永線での復旧工事



東広島建設業協会会長

上垣 健さん

復旧できた時の喜びと達成感

7月8日の夜、道路にバリケードを築いて欲しいという要請がいくつかありました。確かに雨は降り続けていたのですが、それほどのこととは思っていませんでしたので緊張しましたね。翌朝、山を見ると山頂付近から今まで見たこともないような規模で土砂崩れが起きているのに驚きました。すると市長から、「安芸津から西条方面へ出動途中の警察官が土砂災害に巻き込まれたらしいが、道路が不通になって事故現場に辿りつけない。何とかして欲しい」と連絡が入ったのです。あちこちで道路が遮断されており、出社可能な社員も限定されています。協力会社も含め、何とか20人ほどを集めて現場に駆けつけると、トンネルの出口はふさがれ、あちこちで道路の陥没や土砂崩れが起きており、身震いをしたことを憶えています。それから3日3晩、ほぼ不眠不休の復旧作業に努めました。夜間も投光器をつけて作業を続け、みんなやめようと言いたさないんです。その危機感と使命感はすごいものがありましたね。残念なことに、警察官の方は3日後に下流で遺体で発見されましたが、何とか復旧できた時、みんなのための仕事をやり遂げたという、建設業者としての喜びと達成感はすごく大きかったですね。

暮らしを支える人たちの 努力を知って欲しい

平成30年の豪雨災害は、広範囲で無数に起きたので、市、県、国、広大、林野庁など、さまざまな要請で復旧作業に当たりました。半年から1年と、長期に及んだものが多かったですね。人だけでなく、重機や車も足りず、特に普段は使わない流木を挟んで取り除く機械は取り合いとなりました。

た。現在も復旧作業は続いており、未着手の箇所もあります。山間部の急勾配に砂防ダムを作る工事は、崩落した所を掘り下げて基礎を作りたいへんな作業です。安全面には細心の注意を払っていますが、それでも危険はなくなり、胸を張って市民のためにという意識がないとなかなかできない作業で、職人さんたちの働きぶりを見ると感心しますね。こういう人たちが、暮らしを支えていることを市民の方にも知っていただきたいです。

市と「緊急活動に関する協定」を締結

今回のような大規模災害が起きると、行政、自衛隊、警察、建設業者などがあらかじめ協定を結んでおいて、連携して復旧に当たる必要があります。平成26年の広島市の豪雨災害の時にその必要性を感じ、建設業協会として、もし何か起きたら市と一緒に動けるよう協定を結ぶ話が出たのですが、まだ締結には至っていませんでした。防災訓練にしても、別々にするのではなく、市と建設、電気、インフラなどがすべて集まって行う必要があるし、まさかの時はグループラインなどですぐに情報を共有し、連絡を取り合わなければいけません。令和元年12月によく大規模災害発生時の応急復旧に向けて、市と「緊急活動に関する協定」を結ぶことができましたが、セキュリティなど、解決しなければいけない問題があり、まだ対応がマニュアル化できていません。これからもゲリラ豪雨などによる災害は増えていくものと思われるので、万一の時にすぐ行動できる指示システムが必要です。大切なのは、災害復旧に係る一人ひとりがどれだけ思いを持って取り組んでいけるかということ。その思いをいかに組織化していけるかが、私たちの課題だと考えています。

市や業者の人たちの頑張りで、 2年で農業を再開することができました



王司ヶ谷林道(用水路)の被害状況



小野土地改良区事務局長

赤部 勝彦 さん

150年の歴史を持つ水路が 大きな被害に

7月7日の朝5時頃、ゴーツという変な音がするので外に出たら、水路が泥でいっぱいです。前の家を見たら、泥が入って来ているのですぐに家の人を起こしました。そうして、人を起こしながら上って行くと、一番上の家は柱だけ残してすべて流されています。前の田んぼを見るとおばあさんが首まで浸かっており、みんなで助け上げました。押し流された家もあり、道路も泥だらけで身動きが取れません。床下・床上浸水した家が多かったので、まず泥をかき出して生活できるようにすることから始めました。

私が住む別府宮地地区では小野(この)池から水を引き、延長約7kmの王司ヶ谷(おうじがたけ)水路によって、約50軒の農業用水をまかっています。土砂が流入したものの、小野池は氾濫しなかったのですが、そこから流れ出す谷という谷がすべて崩れ、400近くあるすべての水路が決壊するか泥に埋まるかして、ストップしてしまいました。この地区を流れる関川はかなり集落より低いところにあるので取水することができず、この水路が農業の生命線です。明治元年(1868)に作られた歴史ある水路で、昭和40年(1965)に一部壊れたことがあったそうですが、こんな大きな被害は初めてです。今回の豪雨災害で、一番被害規模が大きかったのが王司ヶ谷水路の周辺だったと思います。

とにかく2年だけ待ってもら

水が来なくては稲が枯れてしまいます。こうして、小野改良区の約50軒で、すべての農作業がストップしてしまいました。私は建設のコンサルの仕事をしていて災害の対処法を知っていたので、

水道局、市役所の維持課などに連絡して水路の土砂の撤去を依頼するとともに、補助金をもらえるよう市役所と交渉を始めました。事態の重要さを認識されて、市長も早い時期に視察に来られましたが、市役所の見解は水路の完全復旧には3年かかるだろうというものでした。しかし、3年も水が来ないなら農業をやめるという人がたくさんいます。「それだけは待って欲しい。何とかして水を通す」と一軒一軒回って困りごとを聞きながら説得すると、「2年なら待とう」とみんなが納得してくれたので、2年で復旧してもらえるようすぐに市に働きかけました。平成30年には谷の水を使ったり、関川からポンプで水を汲んだりして米づくりを続けた人もいましたが、平成31・令和元年度は地権者みんなで米づくりをストップさせました。

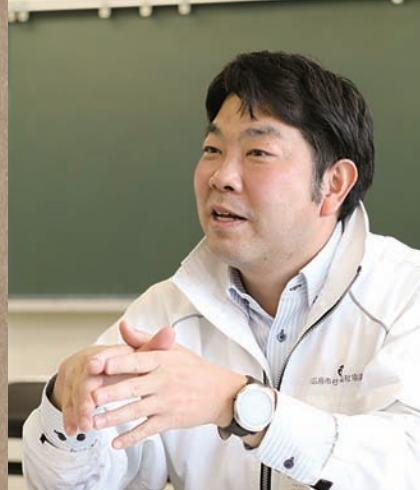
米作りを再開して地域に活気を

令和元年7月から本格的な工事が始まりました。国有林があるために工事の申請が滞った時も、市長自ら交渉してスムーズに進めていただきました。土のうを積んで高さを調整して水路を作り、何とか令和2年4月に仮復旧することができました。5月上旬に田植えを再開できた時はうれしかったですね。市役所や地元の業者の方たちの頑張りの賜物だと大変感謝しております。市役所へ挨拶に行くと、住民が市の職員を誉めてくれたのは初めてだと喜んでおられました。ウンカの害で収量が上がらなかったのは残念でしたが、小野池の土砂を撤去することもできました。令和3年にはブロックで水路の壁を作り、本復旧ができる予定になっています。令和2年度は準備が間に合わずに2～3割の方が米作りをしませんでした。今年から小野土地改良区のすべての人が米作りができるようになり、地域に活気が戻って来ることを確信しています。

平常時に強い地域は 災害時にも強い。普段のつながりは、 災害時に生きてきます



ボランティアさんの列



東広島市社会福祉協議会（市社協）
総務課 総務係長
山原文佳さん

普段からのネットワークが 立ち上げに役立つ

市社協の事務所がある市総合福祉センターは避難所になっているのですが、今までは警報が出ても数人程度しか来られたことはなかったのに、7月6日の夜は100人を超える方が避難して来られ、「これは大変なことが起きた」と思いました。翌日から被害の情報がたくさん入って来て、急いで「災害ボランティアセンター」（災害VC）開設の準備に入り、7月9日に立ち上げました。市社協では安芸津町も被害を受けた平成22年7月の広島県の豪雨災害と同23年3月の東日本大震災を教訓に、平成23年度から「東広島市被災者生活サポートボラネット推進事業」（ボラネット）を始めていました。災害時に必要なネットワークを築くとともに、職員を広島土砂災害や熊本地震などの被災地支援に派遣していた経験が今回非常に役立ちました。

災害VCは9月7日まで活動し、534件の依頼を受けて、延べ6043人もの方々がボランティア活動に参加してくださいました。多くは市内の方でしたが、北海道や東北など全国の社協からも応援がありました。特に以前から交流のあった宮城県石巻市社協の方たちはいち早く駆けつけてくれ、大震災で培ったノウハウをもとに適切なアドバイスをしていただき、すごく助かりました。

コミュニティ・マッチングを進める

災害VCの運営に当たっては、ボラネットで築いてきたネットワークを生かして、地元の様々な団体にご協力いただきました。民生委員児童委員協議会や地元の西条市街地地区社協にはボランティアの受付、大学の学生ボランティア団体やマツダの方たちには活動の調整（ニーズとボランティアのマッチング）、市内の社会福祉施設連絡協議会や商工会議所青年部、シャープ社友会には車両や資器材の調整・運搬、青年会議所には全国のネットワークを生かして資器材の調達も行っていただき

ました。在宅看護職の会、訪問看護有志の会、医師会の皆さんには、体調を崩したボランティアの対応を。時には現場に出かけてボランティアや被災された方の体調管理にも当たっていただき、感謝しています。普段の社協の仕事は、「住民同士の見守りや支え合いの活動」を地域の皆さんと一緒に作っていくことです。このことを生かして今回の災害VCでは、「コミュニティ・マッチング」を進めるよう心がけました。被災した方が直接センターに連絡する「個」と「センター」の関係だけではなく、民生委員や自治会長などが地域の被害状況を把握して、被災された方のニーズを取りまとめ、必要なボランティアの人数や資機材をセンターに依頼するという仕組みです。「地域」と「センター」が一緒に動くことで、被災した方も安心できるはずです。今回、災害VCを運営すること自体が初めてだったので、「コミュニティ・マッチング」が全地域で上手くできたとは言えませんが、地域の中で普段の関係づくりを丁寧に行っておくことによって、各地域が調整機能を果たすことができるというイメージは描けたのではないかと思います。

市民ボランティアの数は 東広島市の財産

災害VCは約2か月で一旦役割を終えましたが、今後災害が起きた時、一歩目を早く踏み出すことができるよう「災害ボランティア」の事前登録を始めました。今回個人でボランティアに参加された延べ4550人の内、80%が市内の方でした。これはすごい数字で、東広島市の財産といえます。この人たちのネットワークを作り、普段から防災・減災に関する研修会や訓練などを通して、地域のつながりの大切さを知っていただければと思います。やはり、平常時に強い地域は災害時にも強い。普段のつながりは災害時に生きてきます。「コミュニティ・マッチング」の仕組みに磨きをかけ、「東広島方式」と言えるようなボランティアセンターの運営方法を確立することが目標です。

難しい判断を何度も重ね 要救助者と奇跡的に生還



救助現場（志和町志和堀）



東広島警察署（当時）

椿 文明さん

救助に向かう途中で 濁流に流される

発災当時は地域課機動警ら係に所属し、7月6日はパトカーで東広島市全域を巡回していました。夕方になるといたるところで道路が水浸しで、マンホールから水が噴き出していましたね。志和町でがけ崩れがあったので交通整理をしていると、「人が濁流にとり残されている」と連絡が入りました。現場に着くと川が氾濫して道路に溢れ出しており、軽自動車に乗った男性がいます。まだ水は膝くらいだったので大丈夫だろうと踏み出したとたん、ものすごい濁流に背中を押され首まで浸かってしまいました。何とか泳いで男性の近くに行くと、その人が手を取ってくれ、助かりました。安全な山裾はすぐそこなのですが、水の流れが強すぎます。車の上に乗って待つことも考えましたが、水かさは増す一方です。「このままだとじり貧だ。逃げ道を探そう」、二人で話して決めました。濁流の中に木が見えたので、それを伝えていくことにし、男性に私の後ろに回ってもらってすり足で歩き始めました。しかし、3本目の木に辿りついたところで先が見えなくなったのです。木に登って待つことも考えましたが、足場になる幹がありません。その時、「大丈夫、こっちに来るか」と声がかかったんです。

木とロープを頼りに進む

軽自動車の先に動けなくなった4トントラックがいました。運転手さんがロープを持っているというので、荷台にくくりつけて投げてもらいトラックの方に向かおうとしたのですが、それまでは濁流を背に受けていたのが、今度は横切る形になるので、一步も足を踏み出すことができません。焦燥きった男性は「おまわりさん、もういいわ」

と言われました。しかし、あきらめたら死ぬだけです。木にロープで体をくくりつけて朝まで待つことも考えましたが、体力がもたないでしょう。警察官の第一の使命は人命の救助ですし、私が拳銃を持ったまま行方不明になると、大きな災害の中、その捜査にリソースを取られてしまいます。絶対に生きて帰らなければいけません。やはり山裾に向かうしかないと、木にロープを張り、それを伝って歩くことを考えました。最後はロープがなくなりましたが、もう先に進むしかありません。命綱なしで2メートル歩き、何とか山裾に辿りつくことができました。私たちが座り込んだ所の両脇は濁流でえぐり取られていたので、少し方向がずれていたら流されていたかもしれません。生還できたのは奇跡だったと思います。

災害の教訓を今後に生かしたい

警察官は職業柄、答えが見えない仕事が多く、常に複数の解決方法を想定していなければなりません。今回、一番のポイントになったのは山裾に行くという判断でしたが、レスキューの人に二次災害になるので本来一人で対処してはいけない現場だとも言われました。しかし、助けを求める人を前に去ることはできないので難しい判断を強いられます。今回の豪雨災害で体力の必要性を痛感したので、筋トレに力を入れ、基礎体力を維持するよう心がけています。

豪雨災害を契機に東広島警察署も変わりました。天候予測に基づいた初動措置をマニュアル化し、大型災害を想定した資機材も導入しました。防災士の指導のもと、要救助者への対応等の訓練も重ねており、次に起きる災害では今まで以上の対応ができるはずです。初動で逃げ切れれば、レスキューが向かえます。市民の皆さんには日頃から避難経路を確認し、早めの避難を心がけていただけるようお願いいたします。

東広島では従来の考え方では説明できない現象が起きており、発生メカニズムを解明することが必要です



広島国際大学南側



広島大学教授 防災・減災研究センター長
前・砂防学会会長
海堀 正博 さん

学内のががら山で 実証実験に取り組む

平成30年の豪雨災害は総雨量の多さが特徴でした。東広島市の7月6日18～20時頃の最大時間雨量は40～50ミリほどと強かったのですが、先行降雨の影響がまだ大きくはなく、崩壊や土石流等はまだ起きていません。しかし、7月7日の未明に先行降雨の影響が300ミリ超えになってから、再び、最大時間雨量30～50ミリもの強雨が加わったことから、それが引き金になって無数の土石流が一斉に発生してしまいました。土石流や山の崩壊の発生箇所は、人が住んでいる近くだけで1500～2000か所に達していたと思います。7日の朝、ようやくの思いで広島大学に着き、研究室から見える山のアちこちで土石流が起き、まだ水が流れ続けているのを見た時の驚きは忘れられません。広島国際大学の周辺では、山頂近くから放射状に土石流が発生し、大きな被害をもたらした山がいくつかあります。従来の表層崩壊発生モデルでは、急勾配の斜面で表土層が雨で飽和する過程で、崩壊が起こるとされてきました。しかし、東広島市では傾斜が緩く、安定度があるとされる山でも崩壊が起きており、従来のモデルでは説明ができません。広島大学内にも同じ山容のががら山が土石流を起こしているのです。そこをモデルフィールドとして実証実験を行っています。東広島には似たような山が多いので、これらに共通の発生メカニズムを解明できれば、警戒基準の精度の向上につながると思います。

地域の自主防災活動に 感銘を受ける

私は東広島市の災害検証委員会の委員も務めま

した。会議での検証を通して、内閣府も注目した黒瀬町の洋国団地や八本松地域など、災害の前から自主防災活動にしっかり取り組み、被害を最小限に抑えることができた事例を知ることができ、感銘を受けました。他の被災地域でも確実に防災意識が高まり、真剣に防災活動が続けられます。この経験を被害にあっていない地域へと広げていくことが必要だと感じました。また、災害時の報道では避難率が数%と伝えられましたが、現地調査で話を聞くと20%近くの方が近くの少しでもより安全な場所に行くなどの行動を取っていました。現在使われている避難率は避難勧告対象者のうち、指定された避難所に行った人の割合なのですが、何らかの形で避難行動を取った人の割合にする方がより現実的な解釈ができるようになると思います。

学際的に防災・減災に取り組む

私の専門とする砂防学は、土砂災害の防止・被害の軽減を目的とする学問分野です。今回の豪雨災害を受けて、広島大学では「防災・減災研究センター」を立ち上げ、総合大学の強みを生かして学際的な取り組みを続けています。医学や看護学では、避難所の環境の改善や感染症対策、交通工学では、浸水、冠水による交通遮断の防止や早期回復、心理学では避難のタイミングのつかみ方など、いろいろな学問分野が何らかの形で防災・減災に貢献することができます。

今回、市内各地を調査して、土石流が起きた場所に過去の災害の伝承があり、そのことを伝える石碑も多く建てられていることを知りました。私は広島県防災Web内の「地域の砂防情報アーカイブ」運営委員会の委員長を平成23年度の開始時より続けておりますが、記憶を風化させないようにするため、災害伝承の検証を行い、後世へ伝えていくことがとても大切だと思っています。

豪雨災害の反省を踏まえて、 人命を守る体制を強化しました



高機能消防指令センター



東広島市消防局長
石丸 泰三

一日に516件の災害通報

河内町入野で避難勧告が出たのに合わせて、7月5日17時30分に東広島市災害対策本部と連携して警防本部を立ち上げました。県内でも一番早かったと思います。6日の18時頃から降水量が増すと、指令センターで119番通話が鳴りやまなくなり、19時40分に大雨特別警報が発表されました。フル出動体制に入って署員全員を参集させたのですが、道路が寸断されて、なかなか現場まで辿りつくことができず、辿りつけた隊とも連絡が取れない状況が続きました。その間にも電話は鳴り続け、通常1日40件のところが、6日だけで516件あり、途中から命に影響がある通告を優先するコールトリアージを取らざるを得ない状況となりました。21時37分には黒瀬町のイラスケ川の欄干で男性の遺体が見つかったという情報が入り、行方不明情報が届く前だったので驚きました。今回7つの現場で犠牲者が出たのですが、6日の21～23時の間に3か所、7日の5～7時の間に3か所で事故が発生しており、豪雨の山が2回来たことが分かります。

全員救出に歓声が上がった 安芸津町の現場

東広島市消防局の署員は291名、6日から8日までの活動人員は延べ607人で、一人2～3回出動したことになります。人命を救助したい一心で血気盛んの署員が多いですから、二次災害と体調管理には十分気をつけるように言って送り出していました。握り飯の食事をとりながら、現場から現場へと転戦していました。東広島市には約1,600人の消防団員がおり、署員と応援に駆け付けてくれた自衛隊や緊急消防援助隊大阪府隊の人たちも含め、2,000人近くが豪雨災害の前線で動いていたことになります。最も印象深いのは、土砂崩れで倒

壊した家屋から一家4人を救出した安芸津町木谷の現場です。6日21時17分に通報がありましたが、トンネルが被災して通行できなかったため、現場に着くまでかなりの距離を徒歩で移動しなければいけませんでした。重機が入らないため、手で土砂をかき分けなければならない状況で作業を続け8日0時58分に最後の方が救出された時には警防本部でも歓声が上がりました。

現場の映像をリアルタイムで確認

豪雨災害を受けて、消防局では新たな試みを進めています。一つは「高度救助隊」の設置です。画像探索器、地中音響装置、熱画像直視装置など高度救助資機材と最新の救助工作車を導入して、現在の救助隊員を再訓練し、ワンランク上の救助活動を目指して、令和3年4月に発隊します。「高機能消防指令センター」も12年ぶりに更新しました。回線を増やすとともに、4Gカメラや可搬型カメラ、ドローンを導入して、現場の映像を素早くリアルに、警防本部に流せるようにし、迅速に出動指令や自衛隊等への派遣要請ができるようにしました。市の災害対策本部と専用ネットワークで結び、連携も強化しています。現場の状況が良く分からなかったことが今回の災害の反省点なので、特に重点的に改善をしました。さらに、広島大学と共同で全国初のVRによる「土砂災害の避難行動体験ソフト」も開発しています。被災者にヒアリングし、河川工学などの知見を交えて制作しました。今まで9,000人以上の方に見ていただき、84%の方が早期避難の重要性を認識したと答えています。東広島市には外国人の方が多いので、英語、中国語、ベトナム語版も制作しました。2度と今回の規模の被害を出さないためにも、市民の方々には発災前から避難の重要性を認識し、適切な行動を取っていただきたいと思います。

被災地域の学校として、防災教育の先頭に立ち、最悪の事態に備えて、最善の準備をしていきたい



教室に非常袋を完備



東広島市立河内小学校校長
(前・東広島市立河内西小学校校長)

高橋 修さん

砂防ダムを越えた土砂が流入した河内西小学校

平成30年は河内西小学校の校長を務めていました。7月6日は大雨警報が出たため臨時休校で、教職員も早めに帰りました。翌日、地域の方から「学校が大変だ」と電話があったので登校すると、裏山から大量の土砂が流れて駐車場の半分以上を埋めつくし、校舎をぐるっと回って運動場に流れ込んでいました。裏山には砂防ダムがあったのですが、それを乗り越えていたのです。土砂の厚さは深い所で40～50cmもありました。幸い校舎に土砂は入らず、被災児童もいなかったのですが、学校までの道路が寸断されたため三原市大和町の会社からスクールバスが入って来ることができませんでした。従って10日の市内一斉休校に加え、11日も臨時休校せざるをえませんでした。教職員の通勤も大変で、教頭は広島市西区の自宅を離れて三次市のご主人の実家に泊まりこみ、そこから通って来ていました。土砂の完全撤去にも2週間を要しました。河内西小学校は平成30年度で閉校になることが決まっていた。その上中河内地区の土砂災害で河内西小初代校長が亡くなられたことにも驚きと深い悲しみを憶えました。

断水のため休校した河内小学校

土砂被害はありませんでしたが、地域全体が断水したため、河内小学校も市内の他校より1日多く臨時休校しました。1週間以上も断水したため、地域の方が水の入った大きなタンクを持って来られるまで、プールの水をバケツで汲んでトイレに流していたそうです。11日午後に学校北側にある正反田池が決壊する恐れがあるという警報が出た

ため、児童と職員が避難のため町内を右往左往するということもありました。一番被害が大きかった中河内が校区ということもあり、危険な目にあった児童や長期の避難所生活を余儀なくされた児童もいたため、スクールカウンセラーを派遣してもらい、心のケアにも努めたそうです。

防災教室を始め、非常袋も準備する

私は平成31年に河内小学校に転任しました。被害の大きかった学区なので、防災意識の高い子供たちが多く、避難訓練や防災教育にも真剣に取り組んでいます。地域の方に声をかけていただき、平成31年から防災教室も始めました。広島県西部建設事務所の方に来ていただき、災害の恐ろしさと避難の重要性を模型などを使って分かりやすく学んでいます。砂防ダムの見学も行いました。最初は3、4年生対象だったのですが、好評なので全校児童に広げました。

もう一つ特徴的なのが、学校で全児童に非常袋を持たせていることです。豪雨災害で被害があった学校に送られた寄付金をどう使うか考えた時、本校には避難実績があったので、とっさの時に持って逃げる非常袋を選びました。前回の避難時にとにかく水に困った経験から保存水や乾パンなどを入れています。それに加えて一度袋を家に持って帰って保護者の方と話し合い、子ども達が必要だと考えるものを中身に加えてもらっています。

被災した地域にある学校ですから、防災教育の先頭を走らなければいけません。「備えあれば憂いなし。」です。災害では想定外のことが起こります。最悪の事態を想定して、最善の準備をしていきたいと思っています。

川と山から濁流が一気に押し寄せ、 またたく間に工場が冠水



工場1Fに河川水が侵入



株式会社ヒロタニ 総務部部长

伊妻 勉 さん (左)
品質管理部部長 当時工場長
野田 安春 さん (右)

橋が落ちて工場が孤立する

7月6日はずっと雨が降り続いており、鉄道が運休になったところもあるとは聞いたのですが、当社はほとんどの社員が車で通勤していることもあり、通常通り操業を続けました。しかし、徐々に道路の冠水や渋滞で帰ってこられないトラックが増えていき、19時頃に会社の近くの小さな橋が崩落して、通行できなくなってしまいました。そのため、日勤で残業をしていた人と、崩落前に会社に着いていた夜勤の人が会社に関じ込められました。定時の17時で会社から帰っても、多くの人が帰宅難民になり、中には3日間も高速道路の駐車場まで過ごさざるを得なくなった人もいます。

20時頃から30分ほど雨が怒涛のように降り続き、21時20分頃、ついに駐車場と工場の1階が冠水しました。工場の横を流れる関川は平成26年8月の豪雨で氾濫したため、新たに土手を築いていたのですが、それを突き破って水が押し寄せました。最初はじわじわと海が満潮になって行くような感じだったところに、ゴーンとすごい水圧が来て、ドラム缶が宙に浮きました。関川だけでなく、山側の小さな川筋も氾濫して、会社の両側から濁流が一気に入ってきて来たんです。

熱波と悪臭の中での復旧作業

その後は雨も小ぶりになり、水も引いて行ったので、深夜23時くらいにリフトを出して川にはまっていた車を除け、土のうでふさいで何とか橋があったところを通れるようにしました。渋滞に巻き込まれて右往左往している人の電話から推測し、通行できる道がだいたい分かったので可能な人は帰り、残った50人ほどに非常食と毛布を配りました。

平成26年8月の豪雨で冠水したため精密機械等は上の階に上げてあったので、設備には問題がなかったのですが、検査器具や備品が土砂をかぶってしまいました。出勤できる人たちが清掃しましたが、多い所で1メートルほど土砂が積もり、熱波と悪臭でたいへんな作業になりました。流れ出した機材やドラム缶も多く、広島市安佐北区の白木町まで引き取りに行きました。工場が稼働できても材料や容器が入って来ず、出社できない社員も多かったため1週間の休業を余儀なくされました。

災害を受けて 防災・減災体制を整備

幸い怪我人はいなかったのですが、操業を続けるかどうかの判断が遅れたため、会社から帰れない人や帰宅難民が出てしまいました。経験したことのない災害だったことは確かですが、このことを反省し、当社ではさまざまな試みを進めています。まず、今までは進路が予測できる台風の場合のみ開いていた「水防会議」を豪雨の時も開くようにしました。県の防災サイトを見て、ハザードが危険水位に達し、累積雨量が100ミリに達すると会議を開催し、早めの判断を心がけるようにしました。また、安否確認のシステムも本格稼働させました。個人の携帯を登録してまさかの時にメールを一斉送信して返信してもらうシステムですが、個人情報の問題もあり、なかなか導入が進みませんでした。それが、今回の豪雨災害でみんなの意識が変わりました。何度もトライアルをくり返して返信率を上げています。当社は志和町の本社工場のほか、八本松町、防府市、山口市、滋賀県、福岡県に工場があり、全社で災害に対する危機意識を共有することがこれからの課題です。

東広島市 平成30年7月 豪雨災害記録誌

〒739-8601 広島県東広島市西条栄町8番29号

東広島市総務部危機管理課

TEL：082-420-0400 FAX：082-422-4021

